

viewpoint

THE SAISON FOUNDATION

65

セゾン文化財団ニュースレター第65号
2013年11月30日発行
<http://www.saison.or.jp>

公益財団法人セゾン文化財団

The Saison Foundation Newsletter — 30 November, 2013

目次

- 佐東範一◎ JCDNの15年を少しだけ振り返ってみて..... p.01
- 滝口 健◎ ファウンド・イン・トランスレーション:
国際共同制作の創造プロセスにおける翻訳の役割を探る..... p.05
- 塚原悠也◎ ある物体は名付けられる以前より、常にそのものである..... p.09

Article—①

JCDNの15年を少しだけ 振り返ってみて

佐東範一
Norikazu Sato

自分で問うてみる。もしJCDNがなかったら、日本のコンテンポラリーダンスは今頃どうなっているだろうか? どのような意味があったのだろうか? 私自身1997年、期待通り*アメリカのワーキングビザがおりて、ダンス・シアター・ワークショップ(DTW)で働いていたら、今頃どうしていただろうか? 正直、JCDNがなかったとしても、あまり社会的には変わりはないかもしれない、そして、まだまだ何も変わっていないんじゃないか、という現実的な思いと、ひとつのきっかけぐらいには、なったんじゃないかというのきな思いと、いや大きな影響を与えてるよ、という幻想がある。ある時代の流れの中で、ダンスだけでは

なく、日本の芸術の在り方の大きな転換期にいるような気持ちで、この15年間を走ってきた。

15年前

1997年9月、ニューヨークのDTWでの、1年間のアートマネジメント研修を終え、98年から3年間の準備期間を経て、2001年5月に水野立子と共にNPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)を設立した。98年当時、コンテンポラリーダンスの公演やワークショップを主催するスペースや公共ホールは、全国で10にも満たないぐらいだった。隣の県で公演するよりも、ニューヨークやパリで公演する方が実現性が高いというくらい、国内が空洞化していた。しかし東京のセッションハウス、横浜のSTスポット、大阪のDANCE BOX(現・神戸)では、コンテンポラリーダンスの若いアーティストが生まれ、作品を創り、公演を行うことをサポートしていた。何か新しい時代が始まるエネルギーに満ちていた。そして札幌のコンカリーニョでも新しいダンスのプログラムが始まった。そのころはお互いの情報交換はほとんどなく、アーティストもほかの地域で何が行

*立ち上げの経緯については「viewpoint」15号「社会とダンスの結び目—Japan Contemporary Dance Networkの発足に向けて」を参照されたい。

われているのかわからず、一方主催者もどこにどのようなアーティストがいるのかわからないという時期だった。そしてコンテンポラリーダンスのアーティストは関東と関西にしかいない、と言われていた。

あれから15年。コンテンポラリーダンスの状況はかなり変わってきたと思う。全国的にコンテンポラリーダンスのワークショップや公演が行われるようになった。主催者も増え、ダンスのプロジェクトやイベントも全国的に確実に増えてきた。各地で継続して活動を行うダンスアーティストが生まれた。その頃には考えられなかったが、ダンスの活動だけで生活(ぎりぎりだが)出来ているアーティストも、まだまだ少ないけれど、いるようになった。

コンテンポラリーダンスのアーティストは公演だけで食べていくのは至難の業である。はっきり言って現在の日本の状況では無理だ。バレエなど教室を持っている分野は、“教え”で食べていけるかもしれないが、ワークショップを基盤としたコンテンポラリーダンスのアーティストでは収入が安定しない。当初から作品を創ることと並行して、地域の学校などでのアウトリーチなどが広がることによって、生活できるのではと思っていたが、そのことを実現できるアーティストが生まれてきたことは、大きな変化だと思う。

「踊りに行くぜ!!」から「踊りに行くぜ!!」II(セカンド)へ

2000年に札幌・東京・横浜・大阪の4地域で始まった「踊りに行くぜ!!」は、10年目を迎えた2009年までに全国29都道府県43地域



「踊りに行くぜ!!」II(セカンド) vol.3 カミイケタカヤ作品



別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」での「オープンルーム」より
(於別府市中央公民館)

で開催し、258組のアーティストが出演、304作品の上演を行った。最後の3年間は毎年10～12月の間に21地域での開催という、毎週どこかで「踊りに行くぜ!!」が行われている状態であった。日本国内だけではなく、「踊りに行くぜ!! in Asia」として、インドネシア・フィリピン・中国・マレーシア・ベトナム・カンボジアでも公演を行った。

東京や関西以外でコンテンポラリーダンスを観る機会がなかった時期に、この「踊りに行くぜ!!」が、地方で活動するアーティストや主催者にとって、唯一の機会となっていた。可能な限り新しい地域を開拓し、コンテンポラリーダンスの種を植えることを継続して行っていた。東京や関西以外でも、ネットワークで繋がっていれば、日本のどこで作品を創ろうと関係ない、ことを目指していた。しかし最後の数年は同じアーティストによる同じ作品が繰り返し応募されることが多くなり、全国的に新しい作品やアーティストが生まれてきていないというジレンマを抱えていた。同時に観客数もあまり増えず、10年を機にやめようかと真剣に考えていた。その結果、ひとつの役割を終え、違う方法で現状を変えることが出来るのではと思い直した。

2010年からは「踊りに行くぜ!!」II(セカンド)として、完成された作品を上演するのではなく、ダンス作品のアイデアを公募し、選ばれた作品の制作と巡回公演をサポートするプロジェクトへの変革を行った。

新しいアーティストや作品が生まれにくい大きな要因として、日本でダンス作品を創ろうとすると、その振付家に、作品を創ること、お金を集めること、稽古場を借りること、公演会場との折衝など、すべての責任がかかってくる。そこを、変えられないだろうかと思った。もっと公共ホールや主催者が出来上がった作品だけを上演するのではなく、作品を創ることからサポート出来たら、アーティストは作品制作に集中することが出来て、社会に認められる作品がより多く生み出されるのではと思った。そしてダンスのアーティストが作品制作により集中するために、すでに海外では当たり前のように行われているアーティスト・イン・レジデンス(AIR)を、日本でも普通に行えるようになったら状況は変わるのではなからうかと思い、レジデンスの場所を開拓している。

「コミュニティダンスのスタート」

2004年、英国にダンスを観に行く機会があった。その時に「コミュニティダンス」という言葉に出会った。英国全土の10地域に“ナショナル・ダンス・エージェンシー”という国のダンスのための機関が存在している。地域の中で、子供から高齢者、障害に関わらず、“すべての人にダンスを”“誰もが生まれながらのダンサーだ”、という考えの“Dance for All”という言葉に出会った。私にとって、アメリカの“ネットワーク”に続く、大きな出会いだった。

“ダンスと社会を結ぶネットワーク型NPO”としてJCDNを設立し、コンテンポラリーダンスに関わる全国のアーティスト・主催者・制作者・評論家などを紹介する「JCDNダンスファイル」を毎年制作し、「踊りに行くぜ!!」や様々なプロジェクトやコーディネートを、すでに行っていたが、なんだかダンスという世界に留まっているような気がして、もっと“社会とダンスを結ぶ”方法を模索していたころだった。

英国の事例を学びながら、日本式のコミュニティダンスの方法を創りたいと思った。別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」での別府市中央公民館全館を利用して行った「オープンルーム」。



沖縄・キジムナーフェスタ コミュニティダンス作品「コザの息」出演者集合写真
Photo: 草本利枝

その方法は、ひとりのアーティストだけではなく、何人ものアーティストが関わり、それぞれ、子供、若者、おやじ、高齢者など、いろいろな世代に分けて作品を創り、それらの作品を繋げてひとつの大きなコミュニティダンス作品を創ることだった。この別府での「オープンルーム」がきっかけとなり、福岡、京都、鳥取、静岡そして沖縄などで、JCDNがコーディネーターとなり、コミュニティダンスを行ってきた。これまで1000人を超える人々が、ダンスを初めて踊るきっかけとなっている。

「もう女を捨てて生きてきたけど、今回初めて踊って、もう一度女をやってみようと思った」と50代の女性。「会社が定年になって生きる意味が見つけられず、いつ死んでもよいやと思っていただけ、ダンスに出会って、生きていく力が湧いてきた」と60代の男性。「ほとんどひきこもりになって、会社に行って、帰って寝るだけの毎日だったけど、たまたまこのチラシを見て参加した。このような舞台上で照明があたって自分が踊っていることに感動して、公演の間中ずっと泣いていた」と30代の女性。「来年も生きていたら絶対参加するからね」と80代の女性。ダンスというものがかここまで力があるものだとコミュニティダンスを行って初めて感じた。

たぶん人間には、生まれた時から話したり、歩いたりするのと同じ

ように、踊る力と、何かを創り出す力があり、アーティストによって導き出されたそれらの力は、自分というものの可能性を自分自身で発見することになる。その発見が生きる力となる。今の時代に生きる力を生み出せるものなんて、そんなにあるものではない。もっともっとコミュニティダンスを広げたいと思う。そのためには、ファシリテート（促進）するアーティストが育つことが必要と考え、来年から英国のコミュニティダンス財団と共同して、日本でファシリテーター養成合宿を計画している。

3.11を経て、「習いに行け!東北へ!!」

2011年3月11日の地震の時は、ちょうど「踊りに行け!!」II（セカンド）の最終地、東京のアサヒ・アートスクエアでのリハーサルの直前であった。震災後の1ヶ月後から、JCDNでは“ダンスアーティストによる復興支援マッチングサイト「被災地からだところを元気にするダンスを届けます—からだをほぐせば、こころもほぐれてくる—”という形で、アーティストが被災地に行くことのサポートを行ってきた。約50組のアーティストや制作者が登録してくれて、被災地に赴き、からだをほぐす活動などを行ってきた。

しかし1年を過ぎたころから、ひとつひとつは実現できて、その場では成立しているのだけど、活動が広がっていかない、継続していかないというジレンマを感じていた。被災された方のために何かしたい、何かできるのか、という熱い思いはあるが、何かはずれているのではと思い始めた。これは実際にやってきたことを否定する意味ではなく、時間の経過とともに、こちらが主体になって何かをしに行くのではなく、地元の人たちと関わりながら、一緒にお互いのために“何か”を創っていくことが必要なのではなからうか、と思い始めた。どうしてもこちらから何かをしに行くというのは、被災地の方が受け身になってしまう。そこが、もう違うのでは。支援ではなく、関わりを創ること、その関係性から何かを創っていけないか。

東北の郷土芸能に触れる機会があった。東北は郷土芸能の宝庫ともいわれる地域である。郷土芸能が地域の中で精神的な支えとなっている。子供から高齢者まで参加し、それぞれの芸能を次世代に伝えている。踊りや音楽というものが、生活にしっかりと密接している。JCDNの目指しているものが、すでに日本には古くから存在していた。日本のコミュニティダンスだと思った。ならば主体は被災地の



JCDN国際ダンス・イン・レジデンス・エクスチェンジ・プロジェクト
韓国-日本共同制作プログラム @福岡



「習いに行け!東北へ!!」 @大船渡・越喜来

方で、ダンスのアーティストが受け手、そしてメディアとなり、東北の芸能や文化の価値や素晴らしさを国内外に伝えることはできないだろうか。今年の8月から「習いに行け!東北へ!!」を始めた。ゆくゆく、被災地での国際芸能フェスティバルや、国際アートセンターに結び付けたいと考えている。

これから

この7月に、本当に久しぶりに、総会を行った。正直、総会を開くのが怖かった。会員の方々に支えられてJCDNが成立しているのだけれど、当初作成していた「JCDNダンスファイル」が紙媒体からネット上になり、インターネットによるチケット予約システム「ダンスリザーブ」に代わるものも現れたり、JCDNを始めた時には会員の特典として価値があったものが、時代の流れの中で、その価値が薄れてきていることがわかってきた。しかし、それに取って代わるような、会員特典を見つけれないままだった。多くの意見をいただいた。少しだけ紹介したい。

『JCDNとして行っている全てのこと(事業)を、どういう哲学をもって実施しているのか?』ということを最初に集約しておくのがいいと思う。『昔はコンテンポラリーダンスの人口も少なく、文化としてマイナーであった為会員になることで見えてくる仲間や遠方での動きなど、活動をする上でのメリットが会員制度にあった。しかし、今はコンテンポラリーダンスが、文化の領域の中で普通になった時代。そこで会員制度を維持していく意義があるのか? 維持するのであれば、会員にとってどのようなサービスが必要なのか? 中間支援組織としてはそれを考える必要があると思う。』『総会に参加して初めて全体が見えた。全体像がすごく見えにくくなっている。』

『最初の「踊りに行け!」では何をしようとしているか、目的が明確だったから、応援しやすかった。コミュニティダンスも、その目的を明確に書けばいいのでは? 今でも応援団として応援したい人はいっぱい居る。』『JCDNは会員制のネットワーク組織なのか? 事業組織なのか? わからなくなってきた。事業の部分と、会員のための事業というものを別にする必要があると思う。整理しないと皆ついていけなくなってしまう。今日のように、今やっていることが可視化されるとみんな応援したいと思うはず。』『ダンスファイルが冊子であった時代は、つながり(ネットワーク)が手元で可視化されているというのがよかった。WEBになってからはいまいち実感ができない。事業体の方に比重がどんどん移行していると同時にネットワークとしてのつながりが薄くなっている。』

『会員同士のコミュニケーション: 議決を必要としない、特に何かを目的としない、行けるときだけ行くというような集まりの機会があればいいと思う。そういうのであれば行きたいとも思える。不定期でも定期的でも巡回式でもいいし、Skypeで参加する人がいてもいい。』『「今年のJCDNは何を目指しているのか?」』ということ、をわかりやすく中間総括・中期計画を議論する時期に来たのではないかと。どういう観点を重視して、成果を挙げてきたのか?』ということをしつかりと提示していくべき。今までは「踊りに行け!」のJCDNだった。今はコミュニティダンスにシフトしている。[コミュニティダンス] or [芸術性の高いダンス] JCDNのあるべき姿とはどういう姿なのか? いくつかの重点に置きなおしたアピールをするべきだろう。』などなど。

ひとつひとつの意見にその通りだとうなずく。課題が山積みである。しかしこれらは15年間続けてきて、活動が広がってきたからこそこの課題であろう。JCDNがいろいろやりすぎて何をやっているのか、よくわからないという意見も多かった。確かにそうだ。現在どれぐらいやっているのだろうか?と数えると、20以上のプロジェクトが同時に動いている。それも舞台だけではなく教育、福祉、地域、国際と幅広い分野に関わっている。それらを、葦田幸代、神前沙織、北本麻里、千代苑子という熱意のある優秀なスタッフ陣と水野と私の6人で、推し進めている。年々仕事が増えている。年を重ねるたびに、ダンスが社会から求められてきているように感じる。ただ一般的な社会にとってその糸口はあるものの、まだまだ未知のものなので、そこにJCDNのような繋ぐ役割が求められている。

ダンスや芸術というものが、人々の生活にとって、かつ社会にとって、なくてはならないものなのだ、ということをも一人でも多くの人に体験してもらおう場や仕組みを創ること。それが、初めからのJCDNの設立意図であり、たぶん最後まで目標だと思う。そのための新しい方法や場を、全国の仲間たちやスタッフと共に、考え、創ってきたし、これからも創り続けるのだと思う。私にとって、コンテンポラリーダンスもコミュニティダンスも、あまり大きな違いはなく、アーティストであろうと一般の人であろうと、その人でしか生みだせないダンスに出会えることが喜びである。郷土芸能を習うことも、これまで欧米の影響を多く受けて創られてきたコンテンポラリーダンスが、もっと日本のオリジナルな芸能に目を向けることによって、この日本でしか生まれえない豊かなダンスが生まれてくるのではと考えている。

最後に、ニューヨークでの1年間の研修、続けてのトライアングル・アーツ・プログラム、そしてJCDN設立に向けての3年間は、セゾン文化財団のサポートによって実現出来たものです。そのサポートがなければ、絶対にJCDNは生まれなかった。そして、アサヒビール株式会社、トヨタ自動車株式会社、文化庁、国際交流基金など多くの経済的な支えによって、JCDNの活動が実現してきました。本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

2013年10月25日 大船渡にて



佐東範一(さとうのりかず)

NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク代表

1960年北海道生まれ。80年、舞踏カンパニー「白虎社」の創立に参加。94年の解散まで舞踏手兼制作者として活動。98年から3年の準備期間を経て2001年にNPO法人JCDNを始動。アーティストをはじめダンスに関わる個人や団体のネットワーク型NPOとして「踊りに行け!!」「習いに行け!東北へ!!」など、ダンスと社会を結ぶ多様な活動を継続している。JCDNの活動以外に、NPO法人アートNPOリンク理事長、財団法人地域創造「公共ホール現代ダンス活性化事業」チーフコーディネーターなど。

<http://www.jcdn.org/>